
剣に想いをのせて

神崎悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣に想いをのせて

【Nコード】

N4445K

【作者名】

神崎悠

【あらすじ】

孤児院に暮らす少年、アレイドはある事件をきっかけに冒険者を目指す。みんなを守る。その決意を秘めて。アレイドの幼馴染の少女は、錬金術師を目指す。みんなを救う。その決意を秘めて。これは、少年と少女の決意と成長の物語。

第一部学園編連載中です。学園の仲間たちと面白おかしく、時に、シリアスに学園生活を過ごしながら、二人は成長していきます。

(第3話修正しました)

タイトル変更しました

きっかけと決意（前書き）

開いてくださってありがとうございます。

誤字・脱字など指摘していただけるとありがたいです。

感想などいただけると、めっちゃくちゃうれしいです。

きっかけと決意

小さな子どもと外に出かけるときは決して目を離しちゃいけない。特に、森のような天然の遊び場に行くときは。周囲を見渡しながらそんなことを考える。…いないなあ。

もうそろそろ探し始めて一時間は経つころだろうか、僕は大きくため息をつき、空を見上げた。

「……ため息をついたら幸せが逃げるんだよ、アルくん」

僕の横で同じように周囲に目を配りながら歩いている青い髪の少女がそんなことを言ってくる。ため息をつくと幸せが逃げるねえ……何それ？

「エル先生が言ってた」

僕の内心の疑問が出ていたのだろうか？隣に立つ少女——ルナリア・フォグワードはくすりと笑いながら、教えてくれる。

「ふーん……。じゃあ、今度から気をつけるよ」

これ以上幸せが逃げたらいつまで経っても見つけれなさそうだし。僕は、ため息をつきそうになるのをこらえ、もう一度空をちらりと見上げてから、周囲に目を向ける。なんでこんなことになったのかを思い返す。

「アル、ルナ。悪いけど、おちびさんたちを連れてしばらくどこかに出かけてくれないかしら？」

朝食を食べていると、エル先生が僕たちにそんなことを言ってきた。エル先生――エルリール・ミソッド先生――は僕たちの暮らす孤児院の二代目院長だ。彼女のお母さんである初代の院長がなくなってから、その後を継いだ。

この国では珍しい黒髪黒瞳で、身長はやや低くおっとりした性格で、めったに怒らない僕らのお姉さんの存在の人だ。でも、今日はその瞳に憂いの色を浮かべている。

「別にいいけど……。どうかしたの？」

僕の隣に座って、ゆっくりとスープを飲んでいるルナが小首をかしげて尋ねる。確かに先生のこういうお願いは珍しいよな。いつもなら午前中は、小さい子たちの勉強の時間になっているのに。

この孤児院には今僕らを含めて八人の孤児が暮らしている。十四歳の僕が最年長で、次が一つ年下のルナだ。ほとんどの子が十歳に満たなく、十歳を超えているのは僕らを除けば、十二歳の子が1人だけだ。

そんな子たちの面倒をみるのは、僕たちの役割だから別にかまわないんだけど……。

「……今日ね、この町の役所の方がここに来るのよ。あたしは、その対応をしなきゃいけないから」

ああ、そういうことか……。確かに、あれをあの子たちに味わわせるのはかわいそうだしね……。ここ、ミラールの街は商人と観光

の町だ。裕福な商人や、外からの観光客で、この街は賑わっている。そんな中、この孤児院は暮らしている僕が言うのもなんだけど、あまりきれいじゃない。それに、ここに暮らしている子の中には、親が犯罪者のために離れ離れになった子ら割という。

そのせいか、の孤児院は街からは鼻つまみ者として扱われることが多い。僕も小さい頃は、よく大人から侮蔑の目を向けられ、街に出るのが嫌になったことあった。その時はなんでそんな目を向けられるか理由が分からなかったからなあ……。

「わかった。じゃあ、僕とルナで適当にあの子らを連れて遊びに行ってくるよ」

僕はそう答えて、最後のパンを口に放り込むと先に食べ終えて隣の部屋で遊んでいる子供たちに目を向けた。

それで、とりあえず街から近いこの森に遊びに来たんだよね……。うん、遊びに来るまでは良かった。ただ、あまりにも気持ちよかったからルナと話しているうちについとうとしちゃったんだよね……。。

「おーい、レン、カイン、リリアー！」

「シルフィちゃん、ミラルド、フォルクーん！」

僕とルナは子供たちの名前を呼びながら、あちこちを探し回ろうーん……。リリアもいるしそんなに遠くには行っていないと思うん

だけどな。リリアはあの子たちの中では最年長で結構しっかりしてる子だ。森に来た時、あまり奥に入りすぎると危険だってことは言っているし……。

「ねえ、アルくん。このままじゃなかなか見つからなさそうだし、二手に別れて探そうよ?」

ルナが僕のほうを向いてそんな提案をしてくる。……二手に別れるか……。うーん、まだ日も暮れてないし、そんなに危険じゃないかな。それに、なるべく早く見つけたほうがいいし。

「分かった。じゃあ、二手に別れよう。でも、一時間たって見つからなかったらとりあえずこの場所に戻ってこよう?」

あまりうろろし続けるのも危険だし。一時間を目安に、もし見つからなかったら街に戻って大人に助けを求めるしかないかな……。協力してくれるとは思えないから、報酬を払うかもしくはギルドに依頼するか……。そんなことにならないように、

「よし、じゃあ、頑張って探そう! ルナ、迷っちゃだめだよ?」

僕は気合を入れてルナにそう言う。それに対してルナは、

「アルくんこそ、迷わないでね?」

方向音痴なんだから、とくすりと笑い、僕とは別の方向に歩きだした。どうせ僕は方向音痴ですよ……。

「見つからないなあ……」

ルナと別れてから、半時ほど経っただろうか。僕は、声に出してそう呟いていた。うーん、あいつらもしかして奥のほうに行っただのかな？ 魔物が出て危険だから、行かないように、ってあれほど言ったのに……。とりあえず、元の場所に戻ろう。

そう思って、僕はあらかじめ木につけておいた印を頼りに、もと来た道を引き返す。方向音痴なのは自覚してるから、これくらいの対策はとつとかなないとね。前に、街で迷った時はひどかったからなあ……。あ、なんか思い出したらなんかテンション下がってきた……。。

そんな風にテンション下げながらルナと別れた場所に戻る……。そろそろ一時間経つけどまだ、ルナは戻ってきてないみたいだな。とりあえず、ここで待つかな。もしかしたらルナが見つけているかもしれないし。そう思って、僕が近くの岩に腰掛けようとしたその時――

「いやー！ー！」

ここから、少し離れた場所から女の子の悲鳴が聞こえてきた。これは……。ミラルドの声！？

僕はあわてて立ち上がると、その声の聞こえたほうに一目散に駆け出す。くっ、一体何が――！？

アルくと別れてからわたしはしばらく、木々がうつそうと生い茂っているところを中心に探していた。うーん、いないなあ……。アルくん――アレイド・ライムフリー――は、リリアがいるから大丈夫って思ってたみたいだけど、男の子たちは腕白だからなあ……。

……やっぱり森の奥のほうに行っちゃったのかな。どうしよう、そっちのほうも探しに行こうかな。そんなに奥まで入らなければ大丈夫だよ。わたしは、そう決意すると森の奥のほうへ向かって歩き出した。

しばらく進んだところで、ふと足元に目を落とすと無数の足跡が付いていた。うん、この大きさは多分あの子たちのだ。まったく、奥に入っちゃだめっていたのに……！

「リリアー、フォルクーん！」

わたしは、あの子たちの中でも年上の子の名前を叫んでみる。すると、わたしの背後のほうの茂みが、がさがさと物音をたて――

「あ、ルナお姉ちゃんだー！」

中から六歳くらいの女の子が飛び出して、わたしに抱きついてくる。えっと、シルフィちゃん？抱きついてきた女の子の頭をなでていると、後から他の子どもたちも出てきた。

よかった、みんな無事だったんだ……。

「……ルナ姉。ごめんなさい……。迷った……。」

最後に金髪のショートカットの女の子が出てきて、わたしに声を掛けてきた。いつも無表情だけど、今はその目が潤んでいる。わたしはリリアを呼び寄せると、彼女の頭を撫でてあげる。

「……もう大丈夫だよ、リリア。一緒に帰ろうか」

立ち上がったもう一度全員がいるかを確認する。……うん、みんないるし、怪我もしてないみたい。

「じゃあ、アルくと合流しようか。そろそろ帰らないと、エル先生も心配しちゃうしね」

最年少のシルフィの手をとって、みんなを促す。みんなちよつと疲れてるみたいだけど、早くこの辺を出てしまわないと危ないし……。うん、みんな歩き出した。じゃあ、わたしも……

——ガサガサ

「!？」

歩き出そうとしたその瞬間背後の茂みから、音がした。慌てて振り返ると、そこには狼型の魔物——ベアウルフ——がいた。

うそっ!？

「……みんな、走って！」

わたしは前を歩くみんなに叫んでから、シルフィの手を引きながら走り始める。でも、まだ幼いシルフィが急に走り出せるはずもなく――

「――あっ」

足をからませて転んでしまった。その隙を逃さずベアウルフがシルフィに飛びかかる。

「……っ。シルフィ！」

わたしは咄嗟にシルフィを抱き上げ横に跳ぶ。次の瞬間、わたしの右肩に激痛がはしる。見ると、肩口から血が流れていた。

「いやー！」

う……あ……。ミラルドが叫ぶ声をする。う……、みんな早く逃げて……！ 声を出そうとするけれども、痛みで声が出ない。

どうしよう、みんな驚きで固まっちゃってる……！ このままじゃ……！

「……ルナ姉！ シルフィ！」

リリアの叫ぶ声がした後、ベアウルフのうめくような鳴き声が聞こえた。ええ！？

何！？

痛みを堪えて、ベアウルフの方を見る。そこには、何かをぶつけられたのか、鼻の頭を押さえもがき苦しむベアウルフの姿。えっと……、何を……！？

「やった。こしょう爆弾が効いた！ ルナ姉ちゃん！ 今のうちに」

男の子たちがわたしを呼ぶ。わたしはシルフィを抱き上げると痛み肩を無視してみんなのところに駆け寄り、とにかくベアウルフから離れるように走る。とにかく逃げなきゃ……！

——ウオウツ！！——

えっ！？ 身体が動かないっ！？ これって……。周りを見渡すと、みんな同じように身体が動かなくなっているみたいだった。これって……。魔物のもつハウンドボイス！？ そんな……。

ベアウルフは動けなくなったわたしたちを見てゆっくり近づいてくる……。どうしよう……。どうしよう……！

ベアウルフが跳びかかってくる。これから襲ってくる痛みを想像して思わず目を瞑る。

——ギャンツ！？——

……。え？ 悲鳴が聞こえて、おそろおそろ目を開けてみる……。開いた目に最初に映ったのは鮮やかな銀色だった。

「ルナ、みんな、大丈夫！？」

アルくん……！

悲鳴が聞こえてから駆け出してしばらく森の奥に突き進むと――。

「ルナッ！」

そこには今にも飛び掛ろうとしているベアウルフとハウンドボイスにやられたのか僕の叫び声も聞こえていない様子の動けなくなっているルナたちがいた。

くっ、このままじゃあ……！僕は咄嗟に、そばに落ちていた木の棒を拾って、ベアウルフの方に駆け出す。間に合えっ！

――ギャンッ！？――

手に持った木の棒を横からベアウルフにたたき付ける。横からの不意打ちにベアウルフは吹っ飛んでいく。

「ルナ、みんな、大丈夫！？」

後ろを振り返らずに聞く。とてもじゃないけど後ろを振り向く余裕はない。足が震える。気を抜いたら、へたり込んでしまいそうだ。でも、僕がみんなを守らなきゃ……！

――グルルッ！――

僕に殴り飛ばされたベアウルフは、うなり声を上げてこっちを睨み付けてくる。さっきちらっと見たとき、ルナは怪我していた……。逃げる……。無理。だったら、ここで倒さなきゃ……。！

木の棒を構えて、ベアウルフをにらみ付ける。さっき殴ったので、少しはダメージを与えられてるはず。何発か殴れば……。！

僕がそう思った瞬間、ベアウルフは僕に飛び掛ってきた。

「うわぁっ！」

叫びながら、木の棒を振り回す。

——ガウッ！——

ベアウルフは目の前で振り回される木の棒が邪魔だったのか、それに噛み付いて、僕の手から振り払おうとする。これを、離したら………！

「アル兄！」

フォルが叫びながら、ベアウルフに何かを投げつける。あれは……。前にいたずらで使ってた、こしょう爆弾！？

木の棒を奪うのに夢中になっていたベアウルフは、思いっきりそれを受けて、苦しそうに木の棒を離れた。チャンスッ！

僕は、ここぞとばかりに苦しんでいるベアウルフに、木の棒を叩きつける！ 何度も何度も！このこのっ！

何度も叩きつけてるうちに、ベアウルフはぐったりしだして動かなくなった。はあはあ……。倒した……。？

「やったあ。アル兄！」

フォルが喜びながら、僕に抱きついてくる。よかった……。って、そうだ、ルナとシルフィ！

すごい……。倒しちゃった……。わたしは肩の痛みを堪えながら、信じられない気持ちでアル君が駆け寄ってくるのを待った。

「ルナ、シルフィ、大丈夫？」

アル君はシルフィの足の様子を見ながら、聞いてくる。

アル君だって怖かったはずなのに……。わたしたちのことを気遣ってくれる。安心させたいけど……。魔物の爪に引き裂かれた肩は、どくんどくと脈打ちながらまだ、血が止まらない。とにかく、止血しなきゃ……。

そう思って、傷口を押さえようとする。

「っっ」

鋭い痛みが走って、顔をしかめ、思わず声を漏らしてしまう。や

っぱり痛いなあ……。

「ルナ、傷口見せて。……そこまでひどくはないかな」

私の声を聞いたのか、アル君はわたしの方を向く。傷の様子を見ると、自分の服の裾を引き裂き始めた。えっ……、何を？ ある程度引き裂くとそれをわたしの傷口にまき始めた。

「とりあえず応急処置」

ゆっくり巻きながら、アル君はわたしの方を見ながら微笑む。

「よく頑張ったね」

引き裂いた布を巻き終えると、アル君はわたしの頭をなでながら囁いた。その声を聞いた途端、緊張が解けてしまって涙があふれてきた。それを見て、みんなも緊張が解けてしまったのか、泣き出してしまった。

しばらくして、みんなが落ち着きだしたころ。

「そろそろ帰ろうか。あんまり遅くなるとエル先生も心配するだろうし」

アル君はゆっくりと立ち上がって優しくそう言う。いつの間にかだいぶ時間が経ってたみたい。……久しぶりに泣いちゃったなあ。目元を拭ってたちあがると、他の子の様子を見るためにぐるりと周りを見る。

……あれ、今何か？ 周囲を見渡したとき、何かが目の端に映った。それを確かめようと、そっちのほうを見る。

「……！」

そこには、さっき倒したはずのベアウルフが、アル君の後ろから今に襲いかかろうしていた。

危ない！ 叫ぶと同時にアル君を突き飛ばす！ 次の瞬間――

「……っ！」

体にもものすごい衝撃が走り、わたしは吹き飛ばされ近くの木に激突した。

「――！」

アル君が何か叫んでいるのがわかるけど、うまく応えず、そのままわたしの目の前は真っ暗になった。

「――よし、準備できた」

僕は荷物入れの中に必要なものが入っているかを確認し、大きくうなずいた。後は、みんなに挨拶をするだけだな……。――やっぱり住み慣れた町を離れるとなると寂しいな。

「――アル兄ちゃん、準備できた？ そろそろ馬車が出る時間だけ

ど」

カインが僕を呼びにくる。つと、もうこんな時間か。寂しいけど、そろそろ行かなきゃな。最後に、住み慣れた自分の部屋を見渡して僕は部屋を出た。

森でベアウルフに襲われたあの事件から一年がたった。あの時、まだ完全には死んでいなかったベアウルフに後ろから急襲され、僕を庇ったルナはその攻撃を思いっきり受けて、木に叩きつけられてしまった。

その後、ベアウルフは僕たちも襲おうとしたけど、通りかかった冒険者が助けてくれた。その冒険者は大怪我を負ったルナの手当てもしてくれた。けれど、ルナは……。

——くいきい——

孤児院を出ようとしたそのとき、不意に横から袖を引っ張られた。横を見ると、そこには同じように旅支度をしたルナの姿があった。ルナは僕と目が合うとにっこりと微笑んで、僕の手を取り、ぎゅっと握ってくる。

「……うん、がんばろうな」

あの事件の後、怪我をした後遺症か、それとも木に打ち付けられたとき、打ち所が悪かったのか、彼女は言葉を失くした。あの時、僕が油断していなければ。しっかり止めを刺していたかを確認していれば。……もっと僕に守る力があれば。こんなことには、ならなかったのに。

だから、二度とこんな思いをしなくていいように。僕は、力をつける。そのために、今日、僕はこの街を離れ、冒険者になるための養成学校に入学する。ここで、しっかり力をつけて――。

孤児院のみんなを守るんだ。

ルナはルナで、あれから何か決意したことがあるのか、僕と同じ日にこの孤児院を離れる。ルナが目指すのは、錬金薬師。そのため、学園に入ることにしたらしい。それを僕が聞いたのは、つい先週のことだ。

聞いたときは、すごく驚いたけど。ルナの決意を応援したい。

「二人がいなくなると、寂しくなるわね」

「大丈夫。二年後には必ずここに帰ってくるから」

寂しそうなエル先生の声に、僕は自分の決意もこめて返事をする。隣ではルナが僕と同じように、決意を秘めた表情でこくこくと頷いていた。

「うん。待ってるからね」

エル先生は微笑んで、そういつてくれる。他のみんなも、僕たちを見送ってくれる。みんな、寂しそうな顔をしてる。シルフィなんかは、泣いちゃってる。

「……アル兄、ルナ姉。二人が留守の間は任せて」

リリアがシルフィの頭を撫でながらそういつてくる。それに、一つ頷きを返し、

「よし、じゃあそろそろ行こう」

僕たちは出発する。

きっかけと決意（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

プロログです。次回からは、第一部学園編になります。二人は、異なる学園に通うのでそれぞれの視点で描きます。二人は、どのようにして成長していくのか。これからも読んでくださるとうれしいです。

感想・評価などくださると作者は喜びます。

友達と魔物学（前書き）

今回から学園編です。今回はアレイドのほうとなります。
感想などいただけるとうれしいです。

友達と魔物学

「アルー。次の講義って何だっけ？」

長身で赤髪の男が僕に声をかけてきた。彼の名前は、ジェラルド・ファングー。僕はジェイと呼んでいる。この冒険者養成学校——フォルティア学園で知り合った友人だ。彼とは、寮の同室でもある。

「んー、次は魔物学の講義だよ」

次の講義に必要な教材を準備しながら、僕は答える。——この学園に入学してからおよそ半年がたった。半年で、冒険者に必要な知識、技術をちよつとずつ身に着けている。少しは、強くなったのかな……。

「魔物学の講義かよー。めんどくせーな」

ジェイは自慢の赤髪をがしがしと掻きながら、だるそうな顔をする。……こんな表情でも、様になるほど端正な顔立ちをしているんだから、羨ましいというかなんというか……。

「別に魔物の生態や、弱点なんか知らなくても、力押しでなんとかするだろうに」

いや、力押しでどうこうできるのはジェイだけだから……。そう僕が突っ込もうとしたら、

「そんなんだから、あんたは肝心なところで、ドジるんだよ。英雄の息子のくせに」

横から声が掛けられた。そこには二人の女の子がいた。声を掛けてきたのは、勝気そうな女の子だ。彼女は長く伸ばした金髪を後ろで無造作にくくっている。手には魔物学の教材を持っている。

「ちっ、いちいちうつせーな。親父は関係ねーだろ、ティーナ」

ジェイは不機嫌そうな顔をしながら、その二人の方を向く。ティーナ―ティーナ・レスポンス―は、ジェイのその様子に、顔をしかめた。あ、これはまずい。ティーナの説教モードだ。

「あんたみたいに力押しだと、それが通用しない敵のときに困るでしょうが！」

「はっ。お前の弓みたいに軟弱じゃねーんだよ！」

二人はぎゃあぎゃあ騒ぎながら、魔物学の講義教室へと移動を始める。まったく……。同じチームなんだから、そんなに喧嘩しなくても……。呆れて、ため息しか出てこないよ。あ、ため息をついたら幸せが逃げるんだっけ？

「……セシリーは魔物学の講義は得意だよね？」

ため息をついてしまったのがなんとなく、気まずくって僕は、誤魔化すようにもう一人の女の子―セシリア・キュステンに声を掛けた。セシリーはため息をついた僕を見て、くすくす笑いながら答える。

「得意っていうか……。私は魔術師だから、魔物の属性は把握しとかないと」

確かに。耐性のある属性で攻撃しても効果は薄いもんね。でも、セシリーの魔術の強さなら、ある程度の魔物ならそれこそ力押しでいけるような……。

そう思ってセシリーのほうを見ると、どうしたの、と首をかしげてこちらの方を見返してきた。

僕と同じ銀髪だけど、こういう表情や仕種はエル先生やルナに似てるな……。髪の毛の長さも、肩よりちょっと長いくらいだから、別れたころのルナと同じくらいだし……。みんな元気にしてるかなあ。

なんとなくそんなこと思っているうちに、講義室に到着した。講義室では、チームごとに、座ることになっている。僕らは、奥から順にジェイ、ティーナ、セシリー、僕の順番で座る。……ジェイはいつも嫌いな講義のときは、なるべく先生の目に付かないところに座ってる。さっき、ティーナと言い合いをしたばかりなのに、今回もか……。

席についてしばらく、セシリーたちと談笑していると、先生が教室に入ってきて、講義が始まった。講義が始まって、ものの五分でジェイは机に突っ伏して寝始める。隣に座るティーナが顔を引きつらせながらも、先生に気付かれないようにそっとジェイの教科書を立てる。

ティーナもジェイが起きないことは良くわかってるもんね。とはいえ、起こさずにこんなことをするなんて、ティーナも面倒見がいいというかなんと言うか……。でも、孤児院にいたときは友達とのこんなやり取りなかったし、これはこれで楽しいな。

はあ……。またため息をついてそんな二人の様子を見てると、隣

に座っているセシリーと目が合った。セシリーはくすりと笑って、教卓のほうに向き直り講義に集中しなおす。……と、僕も集中しなきゃな。

フォルティア学園は、この国――フォルティア王国――にある唯一の全寮制冒険者養成学校だ。

この学園では、二年半のカリキュラムを組んでいて、卒業試験に合格すれば晴れてギルドに登録される。

二年間のカリキュラムでは、基本的に四人一組のチームを組んで、そのチームで様々な課題にあたることになっている。これは、実際に冒険者になったとき、パーティを組んで依頼にあたるとき、協調性に欠けるなどの問題を防ぐためだそうだ。

僕たちのチームは、斧使いのジェイ、弓使いのティーナ、魔術師のセシリー、そして剣士の僕という構成だ。バランスは割りといいと、思うんだけど、どうだろう。

もうちょい連携が上手くいくといいというのが、実践演習時に講師に言われる評価。まあ、チームを組んでから半年だし。これから、もっと良くなるんじゃないかな。

そんなことをぼんやりと考えてると、

「ライムフリー、Fランクの魔物であるベアウルフの耐性属性と、弱点属性は？」

……当てられた。えっと、ベアウルフは動物型の魔物だから――

「弱点属性は、炎、です」

答えて、先生の方を向くと先生は軽く頷き、続きを促す。あー……、耐性属性って何だっけ？こないだ教科書で見たような気がするんだけどな……。それを思い出そうとすると、机の下からセシリーに足をつつかれ、すぐに指で何か書かれる。……×？あ！

「耐性属性はありません」

そうだよ。ベアウルフに耐性属性はないんだった。だから最低ランクのFランクなわけだし。……最低ランクかあ。あの時、苦労したのになあ。思わず苦い思い出に顔を顰めてしまう。

「ふむ……。正解だ。よく勉強しているな――と言いたい所だが、同じチームに魔物学が得意な奴がいてよかったな」

先生は軽く笑って、セシリーの方を見る。あはは……。ばれてたか。セシリーと目を合わせて苦笑する。流石、先生。高ランクの冒険者なだけはあるよな。

「それから、そこで寝ている馬鹿も起こしておけ」

こっちもばれてましたか……。

友達と魔物学（後書き）

感想・評価・批判などお待ちしております。

魔術と模擬戦（前書き）

今回もアレイドの方の話です。この世界での魔術の話が出てきます。
戦闘描写は難しい……。

誤字脱字があればご指摘願います。

魔術と模擬戦

今日は、週一回で行われるチーム模擬戦の日だ。この日は、午前中のみ講義が行われ、午後は丸々模擬戦に使われる。

対戦チームは学園の中からランダムに決められるから、自分達よりも強いチームと当たることもある。

最初の半年は講義と訓練のみだから、僕たちのチームが模擬戦に参加するようになったのは今月から。

三戦やって一勝二敗っていう戦績だ。負けた相手は格上だけど、やっぱりもうちょっと連携を高めていく必要があるよな……。

今月最後の模擬戦だし、何とか勝ちたいとこだ。

「相手チームは先輩みたいだね」

ティーナが掲示された対戦表を見ながら言う。また先輩相手か……。

負けた二戦のことを思い出し憂鬱になる。そんな僕の様子を見たのか、ジェイがばしばしと僕の背中を叩きながら言うてくる。

「だーいじょーぶだって！ 大分戦いにもなれてきたし。今回は勝とうぜ！」

につ、と勝ち気な笑みに僕も、そうだね、と返す。ところで、ジェイ……。もうちょっと軽く叩いてほしいんだけど……。

「……勝つには、あんたは考えなしに突っ込んでいくのはやめな。力押しでどうこうなるわけじゃないし、あたしらだって援護するの大変なんだから」

ティーナのきつい突っ込みが入る。ジェイも多少は自覚しているのか、うつ、と言葉に詰まった後、小声で、わかったよ、と答えたりしてる。

「相手先輩のチームってどんな構成なんだろうね」

そんなこっちのやり取りをそれまで見ずに、ずっと対戦表を見てたセシリーが対戦表から目を離して訊いてくる。

うーん……。名前しか書いてないもんね。聞いたことない名前ばかりだから、めっちゃくちゃ強いってことはないだろうけど……。

「戦いながら情報を集めるしかないんじゃないかな。相性とかだっ
てあるし」

僕はそう答える。むしろ、問題は、

「それより戦い方はいつもと同じ感じでいいの？」

つまり、僕とジェイが前衛でティーナとセシリーが弓と魔術で援護する戦い方だ。

「うん、それなんだけど。私がメインじゃだめかな？」

セシリーが遠慮がちに僕らに訊いてくる。セシリーがメイン……。

「えっと、どういうこと？」

よくわからなかったから訊き返してみる。他の二人も、同じらしくセシリーの説明に耳を傾ける。

「うん、いつもはあまり威力の高くない魔術を使って援護にまわってるでしょ？　でも、今回は大技を使うから、それまでアル君とジェイ君には時間を稼いでほしいの。で、ティーナは、相手に魔術師がいれば、その人の邪魔を、いなければ、私に向かってくる人を狙撃してほしいの」

なるほど……。威力の高い魔術を使うには意味のある詠唱に魔力を練るからね。その分の時間を稼ぐってことか……。

「いいんじゃない？　いろいろ試してみるべきだしあたしはセシリに賛成だね」

「俺もいいと思うぜ」

ティーナとジェイが賛成の意を示す。

「僕もいいと思うよ。……っていうか、セシリーの本気の魔術みるのって初めてだしね。ちょっと、楽しみ」

セシリーは魔術師の中でも実力者らしく、魔術学の講義では講師が驚いていた。これまでの模擬戦ではセシリーには僕たちのフォーローに回る形で魔術を行使してもらっていたんだけど……。

ん？　あれ？　本気モードってことは――。

「えっと、僕たちが前衛で戦うっていうことは……。セシリーが魔

術を使う瞬間に僕たちは離脱しないといけないってことだよね?」

冷や汗をかきながら、聴いてみる。ジェイも僕のその言葉で気付いたみたいで、顔をひきつらせながら、セシリーの方を見る。

「うん。魔術を使う前に声をかけるから、頑張って離脱してね。信じてるから」

にっこり笑って、そんな風に言われる。僕たちは、一旦顔を見合わせて、

「ちよっ……! そんな無茶な……!」

「おい、セシリア! もし間違って俺らも巻き込まれたらどうするんだよ!」

二人して食ってかかる。や、だって、戦ってる最中に魔術をかわすのって難しいどころの話じゃないから! 普通に戦うより難しいんじゃないか!?

「……男二人して情けないねえ」

「……あん!? 誰が情けないって!？」

ティーナの呟きに、ジェイが反応する。ちよっ……! それは売り言葉に買い言葉だと……!

「やってやるよ……!」

あー、言っちゃったよ……。ティーナとセシリーは笑って僕の方を見る。……了解、頑張ります。

魔術っていうのは何種類かある。一般的に魔術と呼ばれているのは属性魔術。この魔術には、いくつかの属性があり、自身の魔力でその属性に干渉し、意味を持たせる言霊をつなげることと魔術を行使する。属性魔術で強い魔術というのは、個人のもつ魔力とどれだけその属性の意味を理解し、意味のある言霊をつなげることができるかによる。

例えば、「炎よ、燃えろ」で、火が燃え上がる。ただ、これを強くしようとしたら、「炎よ、燃え上がれ」などにすればいい。

セシリーが強いのは、この属性の意味をしっかりと理解していてかつ、意味のある言霊をつなげることができるからなんだ。

ちなみに詠唱というのは、この一連の流れを言う。

もちろん彼女のもつ魔力量も多い。魔力はみんな持っているとはいえ、その量は個人差があって、魔術師を名乗るにはそれなりの量が必要だ。

魔術には他にも種類があり、属性魔術以外で、有名なのは精霊魔術と古代魔術だ。

精霊魔術はその名の通り、自然界にいる精霊の力を借りて行使する魔術のこととで、これは精霊とコミュニケーションがとれるか左右される。完全に才能の問題なんだよね……。

古代魔術は大昔に使われていた魔術で、今の魔術とは体系がまったく違うらしい。さらに、威力がたかいらしいから、禁術扱いとな

っ
ていて、どんなものかはよくわからない。

『水よ、大氣にたゆたうその身を集め嘆きの雨となりて、我が敵を
圧せよ』

「アルくん、ジェイクくん！」

セシリーの声に反応して、僕とジェイは魔術で体を加速させ、一
氣に後ろに下がる。

僕たちが離れた直後、それまで僕たちと切り結んでた相手にセシ
リーの放った魔術が炸裂して、水が滝のようになって、上から相手
の上から降り注ぐ。

さっきからこの繰り返しだ。相手の人たちが近づいてこようとす
るのを、僕とジェイが接近戦で足止めして、その間に、セシリーが
魔術を放つ。

幸い、相手チームには魔術師がいなみたいで、敵からの魔術を
受けることはない。もっとも、その分僕とジェイの二人で四人の攻
撃をしのがなきゃいけないからつらいんだけど……。

相手チームの構成は、槍使い、拳士、剣士、弓使いだ。弓使いが
回復系の魔術を兼任してるみたいで、ちよくちよく回復される。

「っつ！」

危なっ。拳士の拳が、僕の顔をかすめる。このチームではこの人が一番強いらしく、さっきから何度も攻撃を受けそうになっている。っていうか、こっちは剣を使っているの、気にせず踏み込んでくる。

セシリー主体で戦うことにしてるからしのぐだけでいいけど、僕たちが攻めに入るんだったら負けてるかも。

ま、そんな仮定は意味がないんだけど……ねっ！向かってくる剣士の剣に、こちらの剣をぶつけて、後ろに跳ぶ。

直後、セシリーの炎の魔術が剣士と、ジェイが相手にしていた槍使いを吹っ飛ばす。よし、これで残るは後二人！

「……やってくれるじゃん！」

拳士の人はこちらを睨むと同時に、さっきよりもさらに速く踏み込んでくる。やばい、かわせない！

「……ちっ！」

彼の拳が僕に当たろうとしたその瞬間、横から矢が飛んできた。その矢を、撃ち落とすために、僕を狙っていた拳を引っ込める。その隙に僕は、彼から距離をとる。

「ティーナ！」

別の場所で相手の弓使いと闘っていたティーナが姿を見せる。その身体にはいくつかのかすり傷が付いていたけど、大丈夫そうだ。

これで、四対一……。普通に、やればこっちが余裕で勝てるはず。

「降参しますか？」

一応訊いてみる。先輩は、こっちのその質問に軽く口の端を上げると、

「お断り、だ！」

拳を地面に叩きつけた。先輩が拳につけていたグローブには魔術が施してあったらしく、叩きつけた場所から、地割れが起こる。僕は咄嗟に横に跳んでかわしたけど――

「甘えよ、後輩！」

ジェイの跳んだ先には、先輩が回り込んでいた。ジェイは、斧を振るおうとしたけど、それよりも速く先輩の拳が、ジェイの腹に数回突き刺さる。

「がっ！」

ジェイは、吹っ飛ばされて、そのまま倒れて動かなくなる。

「ジェイ！」

ティーナが吹っ飛ばされたジェイの方に駆け寄る。僕は、自分に魔術をかけて、先輩に突っ込んでいく。

速い！何回も剣を振るけども、当たらない。先輩の拳も何とかかわしてるけど、これは何回もは……！

「アルくん！」

セシリーの声に反応して、先輩から距離をとった瞬間、今までよりも威力の大きい魔術が放たれ、光が、一瞬僕らの視界を塗りつぶす。これなら――！

「だから、甘えって」

しかし、先輩はセシリーの魔術をきれいにかわしていて、気付けば僕の目の前にいた。くそっ！

「……甘いのは先輩の方です」

これから、来るだろう痛みを堪えるために目を閉じているとセシリーのそんな声が聞こえ、直後に、先輩が吹っ飛ばされた。……え？

見ると、さっきセシリーが放った魔術の光が、もう一度、収束して先輩の身体に直撃していた。

なんで、一回放ち終えたはずの魔術が……？疑問に思って、セシリーの方を見る。セシリーはにっこりと笑って、

「私が使えるのは、属性魔術だけだなんていつてないよ」

そう答えて、虚空に向かって何事かを語りかける。すると、先ほどまであった光がゆっくりと消えていく。

もしかして……

「精霊魔術……？」

ティーナがジェイを起こしながら尋ねた問いに、セシリーはちょっとだけ申し訳なさそうに頷き、言った。

「ごめんね、黙ってて」

……本当に、セシリーは魔術の天才なんだなあ……。何にせよ、これで対戦成績は二勝二敗になったってことだね。

魔術と模擬戦（後書き）

感想・評価・批判などお待ちしております。

ルームメイトと傷跡（前書き）

遅くなりました。待っててくださった方すみません。

今回は、ルナリアの方となります。時間軸は、やや戻って、アレイドと別れて学園に入学した直後となります。

感想などお願いします。

ルームメイトと傷跡

入学式が終わって、割り当てられた部屋に戻ってきた。うん……、あんなに人が多いとこにいることなかったから疲れちゃったな。

まだ同じ部屋の人は戻ってきてないみたい。

フォルティア王国の端にあるこのアスガルド学園は錬金薬師の養成学校。錬金術や薬剤学を教えてくれる学園なんだ。

薬を作ったり、錬金術で便利な物を作ったりすれば、孤児院のみんなを助けることができる。それに、これで商売すれば、経済的にも助けることが出来そうだし……。

わたしは一年前のあの時に声を失った。それからしばらくは、どうしたらいいかわからなくて部屋に引きこもってずっと落ち込んでた。

アルくんも最初はそんなわたしを見て、自分を責めていた……。これじゃいけないとは思ってたんだ。でも、どうすればいいかわからなかった……。

そんなある日。アルくんは、急に冒険者になるって言い出した。きつと、あの時助けてくれた人のことがあってだと思う。話してくれたことはないけど……。

それからのアルくんは、フォルティア学園に入るために努力を始

めた。

体を鍛えたり、いろんな知識を詰め込んだり……。

そうしながら、わたしには冒険者の仕事がどんなものか、や、仕入れた知識を披露してくれた。きつとわたしを、元気付けようとしてくれたんだと思う。

その聞いた話の中で、依頼を受けて薬草や鉱石を採ってくるっていうものを聞いた時、わたしは思いついたんだ。

アルくんは薬草や鉱石を採ってきてもらって、そこから薬を創れる錬金薬師になれば、アルくんが怪我をした時に助けることができる。薬を売れば、孤児院を助けることができるって。

アルくんとなら、わたしが言葉を発せなくても、意思の疎通ができるはずだし……。

もっとも、この錬金薬師になりたい理由や、アルくんと、っていうのはアルくんには言っていないんだけどね。

断られたら嫌だし……。アルくんは優しいから断らないかもしれないけど、嫌々してもらうのも……。

そう思うと、言えなくなっちゃうんだよね。

ま、まあ、とりあえずわたしたちが卒業するまで少なくとも二年半の猶予があるわけだし。その頃にはきつと……！

「あなたが私のルームメイト？」

荷物を片付け終わってしばらくすると、同室の人が入ってきた。

わぁ……！ 綺麗な人……！

部屋に入ってきたのは、わたしよりも身長の高い女性で、手足がスラッと長くて、スタイルのいい人だった。髪は栗色で、肩の辺りまで伸ばしている。

目元はちよっときつい感じだけど、怖そうな感じじゃない。雰囲気はちよっとリリアに似てるかも。

美人さんだなぁ……。

「ねえ、聞いてる？」

はえ！？ あ、見惚れてて聞いてなかった……。

えっと、どうしよう……。わたし、しゃべれないし……。

とりあえず、わたわたしながら頭を下げる。

それから何とかしゃべれないことを伝えようと、身振り手振りで頑張ってみる。

「？ ……もしかして、しゃべれないの？」

通じた！ わたしはこくこくと頷く。よかった。

あ、でもどうしよう。しゃべれないルームメイトだったらつまらないよね……。

「ちょっと待ってて」

その人は、自分の持っていた鞆を下ろすと、中をぐそぐそと探り出した。

「…あった。はいこれ」

彼女は、紙とペンを取り出してわたしに差し出した。

「それに名前書いて。会話も筆談でいい。ゆっくりでいいから」

彼女はそう言って、わたしの手に紙とペンを押し付けて、わたしが紙に書くのを待ってくれてる。

え、えっと……。と、とりあえず名前書かなきゃ。

『ルナリア・フォグワード。ルナって呼んで下さい』

「……ルナ、ね。私はリズベット・アーノルド。リズと呼んでくれたらいいわ。……よろしく」

そういつて彼女——リズは、私に右手を差し出した。

えっと、よ、よろしく！ わたしは同じように右手を出して、握手を交わした。

「……そうなんだ。そんなことが……」

握手を交わした後、わたしたちはわたしのベッドに腰かけて、おしゃべりをした。

わたしは話すために紙に書かなくちゃいけないからどうしてもテンポは悪くなっちゃったけど、リズはそんなこと気にせずに待ってくれた。

「……でもアルくん？ だっけ？ よかったね、助かって」

好きなんでしょう？ 、リズは微笑みながらそう言う。

あの事件のことを話そうとしたら、アルくんのこと話さないといけないわけで……。

あう……。わたしは真っ赤になりながら、小さく頷く。

「……気持ちは伝えたの？」

レイのその問いかけにわたしは、更に顔を紅くして首をふる。

「……そっか。伝えられるといいね」

リズがわたしの頭を撫でながら、そっと囁く。それに対して、わたしはもう一度小さく頷く。うー……。

でも、よかったあ……。同室の人がいい人で。友達になれそうです。そういえば同い年の友達って初めてかもっ。

わたしがそんな風に内心で喜んでいると、リズが急に立ち上がった。えっと、どうしたのかな……。？

「……そろそろお風呂に行こうと思うんだけど、ルナはどうする？ ……私としては、一緒にお風呂に友好を深めたいところなんだけど？」

そう言っリズはにっこりと笑う。

えっと……

『お風呂じゃ紙は使えないから話せないけど、いいの？』

しゃべれない人間と一緒にいたってつまらないんじゃないかなあ……。

「……平気。私もそんなに話す方じゃないし。……相槌うつてくれ
たら嬉しい」

もちろんそんな風にしか見てないってことじゃないからね、とり
ズは付け足す。

そっか。それでいいなら……。

わたしは頷いて、立ち上がる。

そんなわたしを見てリズは一つ頷きを返して、お風呂に行く準備
を始めた。

さ、わたしも準備しなきゃ。

寮のお風呂に到着すると、リズは脱衣かごを準備し、すぐに服を
脱ぎ始めた。

リズの肌は透き通るような白色で、とても綺麗だった。出るとこ
も出てるし、いいスタイルだなあ……。

わたしもあんなだったらなあ……。溜め息が出てしまう。

リズはそんなわたしを不思議そうに見て、

「……どうしたの？」

と、首を傾げる。わたしは、慌ててふるふると首を横に振り、服を脱ぎ始めた。

上着を脱いで上半身は下着姿になった時、

「っ！」

息を飲む声がリズから聞こえた。あ……、そうか……。

「その傷……」

リズはわたしの左肩から背中に渡ってある大きな傷跡を凝視していた。

あの時、アルくんを庇うために飛び込んで、魔物につけられた傷。

その傷は一年たった今でも消えてなくて、たぶん一生消えない醜い傷跡。

もちろん、アルくんが助かったんだから、後悔はしてない……。でも、アルくんはこの傷跡を見たらどう思うだろうか。

それを考えると、どうしようもなく怖い。そんな気持ちが顔に出ていたのかな、リズはわたしに近寄ってきて、

「……大丈夫だよ。ルナの好きな人はそんなこと気にしない」

もちろん私も気にしない、そう言ってまたわたしの頭を撫でてくれる。

その優しさにわたしは、一つ涙をこぼしたけれども、精一杯笑みを浮かべて大きく頷いた。

それを見て、リズも笑顔を返してくれ、

「……さあ、さっさとお風呂に入りましょ」

そう言って、残りの服も全部脱いだ。

わたしも、脱がなきゃ。でも、ほんとによかったな。いい友達ができて。

ルームメイトと傷跡（後書き）

また新キャラが出ました（^^；

感想・評価・批判など頂けると嬉しいです。

レポートと目標（前書き）

ルナ視点。ちょっと短いです。

レポートと目標

学園に入学してから一ヶ月がたった。言葉話すことができないわたしはクラスではどうしても、浮きがちだったけど、一緒のクラスにリズがいたから、そんなに寂しい想いをしなくてすんでいる。

「……ルナ。ご飯に行こう」

午前の授業が終わって、教科書を鞆にしまっていると、リズがそう言いながら近づいてきた。

わたしは一つ頷きを返して、立ち上がった。会話をするために必要な紙とペンを持つことも忘れない。

もっとも移動中は、文字を書くのは無理だから、会話はできないんだけどね。だから事情を知らない人から見たら、わたしたちが歩いてる様子は首をかしげなくなる光景なんだろうと思う。

だって二人とも談笑するでもなく、沈黙したまま歩いてるんだから。

リズが会話がない状態でも平気な人でよかった。

「……ルナは、錬金術の授業のレポートは書いた？」

リズが食堂で注文したパスタを食べながら聞いてくる。適度に美味しく味付けされていて、値段も手頃だからここのパスタは人気メ

ニューだ。種類もいくつかあるし。

『一応』

わたしは自分が注文した野菜のサンドイッチを頬張りながら、紙に返事を書く。

リズは質問するときは、よく『はい』か『いいえ』で応えられる形で質問してくれるけど、たまには頷くとか首をふる以外の形で返したいもんね。

「……いつの間に」

リズが首を傾げながら聞いてくる。同じ部屋だから、わたしがレポートやってる様子がないのを知ってるから、そんなこと聞くのかな？

『出された日に図書館で書きちゃった。かなりやつつけただけど』

わたしは、リズの様子に苦笑しながら、応える。錬金術のレポートはこれまで、錬金術の発展に関わってきた人物についてのレポートだった。まだ、入学して一ヶ月だから、とりあえず、歴史的な背景からやっていこうってことみたい。

確かに勉強にはなったけど、めんどくさいレポートだったなあ。

そんな風にあの時の苦労を思い出して、物思いに耽っていると、リズが、

「……ルナ。レポートちよつと見せてくれると嬉しい」

わたしに拝むようにして言ってきた。リズは頭いいけど、この手の本を読むのは苦手だもんね。よく寝ちゃってるし。

わたしは了承の意を込めて、笑顔で頷いた。

錬金術とはある物質から別の物質を創造する術。この世界で初めて錬金術を成功した人は、そこから技術を高めて石ころから金を造りだすことが出来たらしい。

そのやり方はもちろん今でも残っている。もっとも、今の時代それは禁止されている。無制限に金を増やしたら経済が大混乱しちゃうもんね。

錬金術はそこから様々の方に発展しって、物の修理や、物質の創造が今ではよく行われている。そして、発展していった分野の中でも行うことが難しく、でも、人々から必要とされる分野——薬術。これに特化した錬金術師を、錬金薬師という。それがこの学園では教えられている。

もちろん、メインがこれというだけであって、この学園の卒業

生は他の分野でも活躍しているんだけどね。

わたしがなりたいのは錬金術師。だって、そうすれば、アルくんや孤児院のみんなを助けることができるから……。

「……ルナ？」

あ、いつの間にか考え込んだみたい。ぼんやりしているわたしを見て、リズが首を傾げている。わたしは、笑みを浮かべて、何でもないよ、と首を振った。

うん、わたしの目標のためにもがんばらなくちゃ。とりあえず今は、お昼ご飯食べちゃわないと。

あ、リズのレポートは無事に書けたみたい。でも、提出した後先生に呼びだれてたけどどうしたんだろう……？

レポートと目標（後書き）

感想・評価・批判頂けると嬉しいです。

英雄と息子（前書き）

久々過ぎる更新…。待ってて下さった方ありがとうございます。

感想などいただけると嬉しいです。

英雄と息子

学園にある闘技場。ここは、特別な時にしか使わない場所。例えば、大会の時に使うとか。

そんな闘技場だけど、今日は、たくさんの観衆——学園の学生で埋まってる。

その理由は闘技場の真ん中に佇む二人だ。学長が国に依頼して呼んだ客人、英雄——スティム・フアングと勇者——カイル・ランパードの二人。

……やっぱり立ってるだけで雰囲気あるよね。

「ジェイの親父さんの武器ってあんなに大きい両手剣なのかい？」

僕の隣に座っているティーナがジェイに尋ねる。確かに。普通の両手剣よりかなり大きい。

あんなの振れるのかな？ 仮に振れたとしてもかわされたら、隙だらけになりそうな気がするんだけど……。

「親父の力は半端ないからな。普通の剣みたくあれを使ってたぜ。それに基本は一撃必殺だからな」

あれを普通に使うのか……。確かに隣にいる勇者と比べても引き締まった筋肉をしてそうだけど……。何にせよ楽しみだな。

「勇者さまがもってるあの剣が聖剣なんだよね？　そう言えばジェイクンのお父さんは聖剣の所有者になれなかったの？」

セシリーが小首を傾げながらジェイクンに尋ねる。そうだよな。英雄なんだし、聖剣に認められてもよさそうなものだけど……。

「あー、親父はあの事件の後、儀式を受けるか聞かれたけど、断つたらしい。若い人が使ったほうがいいって」

へー。聖剣の使い手なんていつでるかわからないだし、王さまもよくそれで納得したな……。それともその時点で候補者がいたのかな？

「うーん、まあ、『英雄』と『勇者』の両方がいた方が国としても、都合が良さそうだもんね」

僕が辞退の理由について考えていると、セシリーがそんなことを

言った。そういう考えもあるか……。

『勇者』は聖剣の使い手さえ現れば、確実に存在するけど、『英雄』はそういうわけにはいかないもんね。

ジェイのお父さんは、十二年前に起きた魔族の侵攻に対して戦った冒険者の一人で、その時に国を救う活躍をして英雄と呼ばれるようになった。

当時は勇者がいなくて、ジェイのお父さんがいなかったらこの国はかなり危なかったらしい。

世界で3人しかいないランクXの冒険者だし。

……いったいどれくらい強いんだろう。これからその一端が観られると思うと楽しみだな。

「ジェイは今回の闘いはどうなると思う？」

「そうだな……。学園生側が一発でも当てれば上出来——」

じゃねえの？、というジェイの言葉は闘技場に巻き起こった歓声でかき消された。

いよいよ始まるみたいだね。今回の模擬戦で学園生代表として戦うのは、普段の模擬戦で一位の成績を納めている先輩チーム。

見たところ剣士が二人に、槍使い、魔術師の組み合わせか。攻撃的なチームだな。

『ただ今より模擬戦の方を開始致します。両者準備はよろしいか。――それでは、開始っ!』

風の魔術で拡声した学園長の声が闘技場に響き渡る。

その声と同時に勇者はその場に座り込んでしまった。まるで、模擬戦など自分には関係がないって感じた。

勇者のその様子にざわめきが広がる。対戦相手の先輩チームも戸惑っているみたいだ。

ジェイのお父さんは勇者と何か一言二言話すと、ため息をついて、先輩チームに向き直って、かかってこいとばかりに手招きをした。

えっと、もしかして勇者は戦わないのかな？ジェイのお父さん一人でも大丈夫ってことか？

先輩たちは一瞬戸惑っていたみたいだけど、すぐに戦闘体勢に入った。

魔術師の人が炎の魔術を放つ。うわ。あのスピードで、あんなに巨大な火球をだせるの!?

セシリーも速いけどそれ以上かも。

対してジェイのお父さんは、鞘にいられたままの大剣を構えると、火球が届く前にそのまま振った。

……あの大きさの火球を風圧だけで消し去ったのか。何て力だろ。

でも、振り切って体勢が整っていないところに、剣士の人たちと槍使いの人が連携しながら攻撃に入る。あれだと一人かわせても、二人目、三人目はかわせない。

「あーあ。終わったな」

ジェイがポツリと呟いたのが聞こえる。どういふことか聞こうとしたその瞬間――。先輩たちが吹っ飛ばされた。

え……？　いったい何が起こったんだろう？

何が起こったのかわからなかったのは魔術師の人も同じ見たいで、呆然としていたところに、すばやくジェイのお父さんは間合いをつめ、掌手で弾き飛ばした。

『勝負あり。そこまで』

学園長の声が響き渡り、闘技場は一瞬静まり返った後、大歓声が起こった。

確かに、英雄は圧倒的に強かった……。でも、何が起こったんだろう。ジェイはわかってみたいけど……。

不思議そうにジェイの方を見ると、僕の疑問がわかったのか、ジェイは肩をすくめながら答えてくれた。

「最初に言っただろ？　親父はあの大剣を普通の剣みたく使うって。振り切った体勢からすぐに戻して、もっかい振り切ったんだよ」

……いやいや。目に見えないスピードでなんて普通の剣でもできないよ……。

それぞれの道と勇者（前書き）

今回もアレイド側です。

それぞれの道と勇者

あれがXランクの冒険者か……。最終目標にはほど遠いなあ……。

模擬戦を観戦し終えた後、寮に帰る途中、僕は多くの興奮と少しの憂鬱を感じていた。

当面の目標はこの学園で冒険者としての技能をしっかりと身につけて、冒険者になること。

でも、やっぱり最終目標は最強と言われるランクまでいきたい。

そうすれば、確実に孤児院の皆を守ることができると思うし。

とは言ってもあのレベルかあ……。

……。だめだ。考えれば考えるほど憂鬱になってきた。気分を変えるために何か話そう。

「そう言えばお父さん来てるんだし、ジェイは会いに行かないの？」

隣を歩いてるジェイに聞いてみる。学園にいる二年間はよっぽど
のことがない限り、家族に会うことなんか出来ないしね。

「あー。いや、別に会う必要ねえだろ」

ジェイはあっさりそう答える。その様子を見ると本当に会いたい
とは思ってないみたいだ。今を逃すと、後二年間は会えない可能性
が高いのに……。

「何で会わないの？」

セシリーも僕と同じことを思ったのか、首を傾げつつジェイに聞
く。

「わかった。親父さんに会うのが照れくさいんだ」

ティーナがにやにやしながら、ジェイの肩をつつく。いやー、そ
れはないんじゃないかな、さっきの答え方からすると……。

「馬鹿。ちげーよ。次に俺と親父が会うのは、俺が一人前の冒険者になった時」

そう約束してんの、とジェイはティーナの手を払い除けながら答える。

へー、そんな約束してるんだ。あれ？でも、一人前ってことは…
…？

「ジェイは学園を卒業してもすぐには、家に帰らないってこと？」

例え学園を主席で卒業したとしても、冒険者としては駆け出し。一人前扱いさるるわけがない。

ランクだって一番下のEランクからだ。

「まあ、そういうことになるな。Cランクになるまで、俺は家に帰るつもりはない」

一般に冒険者として一人前と言われるランクは、Cランクだもんね。とは言っても、実はCランク以上の冒険者っていうのはあまりいない。

実際はEランクとDランクの冒険者が多くを占めている。これは、Cランクの依頼になると危険度が増すからなんだよね。

だから敢えて昇級しない冒険者が結構いるっていう話だ。

そう言えば、僕らを助けてくれたあの冒険者のランクは何だったんだろう……？

「だったらジェイクんはこの学園卒業したら、どっかの街に冒険者として腰を落着けるの？」

「んー。そのつもり。最終的には王都に行きたいけどな。セシリアはどうするんだ？」

「私は、古代遺跡のある町をあちこち回ってみるつもり」

いろんな魔術覚えたいし、とセシリーはジェイの質問に答えてる。

古代遺跡には魔術書とかがあったり、そういうことを教えてくれる精霊がいるらしいからなー。

まあ、その分危険も多いから中にはいれるのは、ギルドに登録されている冒険者だけだし、遺跡もランク分けされてるんだけど。

そっか。ジェイもセシリーも卒業後、どうするか、もう決めてるんだ。

「ティーナは？　どうするつもり？」

僕はチームのもう一人のメンバーにも聞いてみる。

ティーナは弓使いだし、やっぱりパーティを組むのかな？

「あたし？　あたしは自分の故郷の町に戻るよ。そのギルドに入ってしばらくは誰かとパーティを組んでもらうつもり。そのうち一人でもやっていける実力は身に付けたいけどね。アルは？」

ティーナの言葉に、ジェイとセシリーも僕の方に視線を向ける。

「僕は自分の育った孤児院に戻るよ。その皆を守れるようになるのが目標だから」

「孤児院？」

ティーナが目を丸くしている。他の二人も似たような反応だ。

そう言えば皆に、僕が孤児院で育ったってこと言ってなかったっけ？

「僕は捨て子だからね」

昔はこの言葉は僕の胸を締め付けたけど、今はそんなことはない。これもエル先生やルナのおかげかな。

「そっか。いい目標だな」

ジェイがにと笑って、頷いてくれる。他の二人も、微笑みながらジェイに同意してる。

うー……。嬉しいんだけど、何か恥ずかしいな。

もうすぐ寮だ。

——と、その時。

「皆さん。立派な道をお考えですねえ。でも挫折せずに冒険者続けられますかね？」

唐突に声がした。え、誰！？ 慌てて回りを見渡すも誰もいない。

「これは……。風の魔術？」

セシリーが呟くのが聞こえる。そうか。風に声を乗せたのか。聞くときはその逆で、僕たちの声を風で流してたんだ。

でも、セシリーが気付かないなんて……。

「貴女はなかなか優秀な魔術師ですねえ。ちゃんと魔力を感じましたか」

セシリーの目の前にいきなり男が現れる。

どっかで見たような……？

「勇者！？」

ティーナが驚きの声を上げる。あ、そうか。さっき闘技場で見たばかりだ。

でも、何でいきなり……？

「皆さん、不思議そうな顔をしていますねえ。何で、僕がここに来たのか。それは、英雄の息子を見に来たのですよ」

言って、勇者はくすりと笑い、ジェイの方を見る。何か嫌な笑い方だ。

「あの人の息子がいると聞いてたから、どんなもんかと思えば期待はずれですね。その仲間も含め」

今度ははつきりと嘲笑を浮かべる。こんなのが勇者！？

「てめえっ」

激昂したジェイが斧を振りかぶって斬りかかる。って、まずい！

「ジェーー！」

「無駄ですよ」

勇者は思いっきり斬りかかったジェイの斧を、親指と人差し指の二本だけで掴み止めてしまった。

「っ！？」

ジェイは慌てて引き抜こうとするけど、全然動かない。いったいどれだけの力が……！

と、次の瞬間。勇者から、強烈なプレッシャーが発せられる。

っ、殺される……！

「へえ。全く見所がないというわけでもないみたいですね」

そんな言葉とともにプレッシャーが引いていく。回りを見渡すと、ジェイは斧を離し、後ろに飛びすさり、セシリーは魔術を放つ構えを、ティーナは矢をつがえていた。

そして、僕は腰に下げていた刀の柄を無意識のうちに握っていた。

「まあ、せいぜい醜く足掻いて、強くなって下さい」

勇者はそんな台詞とともにジェイの斧を足元に投げ捨て、次の瞬間には、来た時と同じように唐突に姿を消した。

……。僕は、プレッシャーから解放されてその場に座り込んでしまった。皆も同じような感じだ。

それにしてもあんなのが勇者だなんて……。

「くっそ……！ぜってえ強くなってやる……！」

皆何も言わなかったけど、ジェイの想いと一緒なはず。

うん、絶対に強くなる……！

実習と不安（前書き）

何とか早めの更新が出来ました。
今回はルナの側です。

感想とか頂けると嬉しいです。

実習と不安

うーん、見つからないなあ……。わたしは樹の根本を注意深く見ながら、ある薬草を探している。

今は初めての薬草学と錬金学の合同実習の時間。一人一人に課題の薬が与えられて、その薬の材料となる薬草を学園内の探索敷地内から探し出す。そして、それを使って課題の薬を作らなきゃならない。

一応、ちゃんとやれば時間内に終わる課題しか与えられてない。

わたしの課題は眠り薬。今はそのコアとなる薬草である眠り草を探している最中。

うーん……。特徴はちゃんと覚えてるし、こういう場所に生えているかもちゃんと覚えてるはずんだけど……。

見つからない……。もしかして他の薬草と勘違いして覚えちゃってるのかな……。

「……ルナ。見つかった？」

眠り草の群生場所である（はずの）大樹の木陰を探していると、後ろからそんな声が掛かった。

わたしは屈めていた腰を起こしてから振り返って、右手に薬草を持ったリズに向かって首を振る。

「……そっか。眠り草だっけ。私も手伝う」

リズはそう言って近くに生えている同じような大樹の木陰を探しだした。

あ、探す場所はあるってみたい。……って、じゃなくてっ。

わたしは慌ててリズのそばに駆け寄って、服の袖を引っ張る。

「……何？」

えっと、どうしよう……。外での実習だから紙とか持ってきてないし。

何とか身振りで伝えなきゃ。わたしは、リズが持ってる薬草を指差す。それから、校舎のある方を指差してから、リズの後ろに回ってその背中を押す。

リズはもう自分の薬草、見つけれられてるんだから、戻って薬を調合しなきゃ……！

「……戻って作れってこと？」

リズはわたしに押されて歩いてた歩みを止めて振り返ってから、小首を傾げてそう聞いてくる。

やった！ 伝わった！

わたしはこくこくと頷く。

わたしのせいでリズに迷惑なんてかけたくないもん。そんな風に思ってる――

「……大丈夫。迷惑なんかじゃないから」

わっ。思ってることが伝わった？ 何かアルくんと居たときみた
い……。

わたしが、ふとアルくんを思い出していると、リズは、レポート
とかでお世話になってるし、と、呟いて薄く微笑む。

うー、でも……。それでもわたしが不満げな表情を浮かべていた
からか、

「……だったら今度別のことで私を助けてくれたらいいから」

さらに付け足してくる。うー……。もう探すの再開してるし……。

……今度ちゃんとお礼しなきゃ。そう決めて、わたしも探すのを
再開する。

そうやって、しばらく二人で眠り草を探していると――

「あら、リズベット。貴女まだ見つけてなかったのかしら？」

後ろからそんな声が聞こえてきた。振り向くとそこには、赤い髪を巻いている女の人がいた。

えっと……、リズの名前呼んでたし知り合いかな？

そう思ってリズの方を見る。

「……マリー。もう見付けてる」

リズはめんどくさうな表情を浮かべて、右手に持っていた葉草をマリーさん？に見せる。

っていうか、ずっと手に持ったまま探してたんだ……。

「なら何で、さっさと作りにいかないのかしら？ まさか作り方が分からないとでも？」

マリー？さんは、馬鹿にしたような表情を浮かべ、リズの方を見る。

「……作り方もわかる。というか、マリーこそさっさと作りに行ったら」

見つけてるんでしょ、とリズはすでにマリーさんから、視線を外して眠り草探しをしながら呟いた。

マリーさんは、そんなリズの態度にむっとした感じになって、

「私は今から行きますわ！ だいたい貴女はもう見つけてるなら何をしているのかしら！？」

一步リズに詰め寄る。うわ……。すごい迫力……。い、いいのかな。リズは。何か怒らせちゃってるみたいなんだけど。

そんなマリーさんの様子にリズは一つため息をついて答えた。

「……ルナの課題の薬草探しの手伝いをしてる」

「ルナ？」

リズの答えにマリーさんは眉をひそめ、わたしの方を見て、ちょっと驚いた表情をした。

えっと、どうしたのかな……？

「あら、貴女もいたのね。というか、リズベット。貴女、まだこんなのと付き合ってたの？」

マリーさんは、今初めてわたしに気づいたようなことをわたしに向かっていって、はつきりとした嘲笑の浮かべる。

え……。

「その子。孤児院の出身でしょ？　しゃべれないし。それに、背中にはあんな醜い傷跡。あれじゃあ、何の魅力もこの子にはないじゃない」

彼女の言葉にわたしの顔が真っ赤になったのがわかる。

恥ずかしくて、悲しい……。やっぱり、誰から見ても醜いよね……。

マリーさんは、まだ何か言っているけど、わたしは俯いてしまつて、何も耳に入っていない。

アルくん……。彼のことを想い出して涙がこぼれそうになる。

——ばしんっ——

急にそんな音が聞こえて、マリーさんの声が途切れる。顔を挙げると、リズがマリーさんの頬を張っていた。

リズは今まで見たことないような怒った顔をしている。一方、マリーさんは、叩かれた頬を押さえて、呆然としている。

「なっ……!」

「……ルナは魅力的。あなたや私なんかよりもずっと」

そんな言葉をマリーさんに残し、リズはわたしの手をとって、歩き出した。

「……教室に行こう、ルナ。眠り草も見つけたから」

え、あ……。わたしは、何とか頷いて、リズと一緒に歩く。

途中で振り向くと、マリーさんがこっちを睨み付けていた。

……うう。大丈夫かな……。

「……マリーとは故郷が一緒。昔から何かと私に絡んできてたから」

実習も終わって寮の部屋に戻ってから、リズが説明してくれる。
その時には何とか、わたしも落ち着きを取り戻していた。

何でもマリーさんは、リズと同じ故郷の人で、商人の中でも上流に位置する家の人らしい。

同じくらいの階級の商人の家の子のリズにいろいろな対抗意識みたいなのも燃やしているみたい。

「……わたしのせいで、ルナに嫌な想いをさせてごめん」

そんなっ。リズのせいじゃないよっ。あわてて、ぶんぶんと首を振る。

「……ん。でも、ごめん。……ルナは魅力的。……ほんとに私なんかより」

うう……。美人のリズに言われても……。学園内でも人気が高いし。

「……誰かのために頑張れる人はすごく魅力的」

リズはさらに言葉を重ねてくれる。

……うん。だめだね。落ち込んでばかりじゃ。

頑張って立派な錬金薬師になって、孤児院に戻って、皆やアルくんの助けになるって決めたもの。

わたしは気を取り直して、リズに微笑む。

「……ん。ルナは笑顔の方がいいよ。……幼なじみの彼もそう想ってくれるよ」

リズがわたしの頭を撫でながら、そんなことを言う。

うう。……リズって頭撫での上手。何かアルくんのと似てる。

そんなにアルくんには撫でられたことないけどっ。

……あう。顔が熱くなってきた。

……アルくんは傷跡なんて気にしないよね、きっと。

……。きっと、大丈夫。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4445k/>

剣に想いをのせて

2011年10月4日02時00分発行